心光寺御正忌報恩講のご案内

＊期　日　平成十五年十一月十五日（土曜日）・十六日（日曜日）
＊時　間　（日中法要）　十五日午後一時三十分より
（大逮夜法要）　十五日午後七時より
（ご満座法要）　十六日午後一時三十分より
（＊お斎（とき）…十五日正午、十五日午後五時半、十六日正午より）
＊会　場　心光寺本堂
＊講　師　大石　法夫　先生（広島市在住）

心光寺からの便り

窓辺のハナミズキの葉が一枚、また一枚と落ちていきます。枝先に残った葉が冬の訪れを知らせるかのように、音もなく風に揺れています。

◇さて今月は「許されて生きる」ということについて尋ねさせていただこうと思います。

大石先生の四冊目のご著書の題名が「許されて生きる」です。この言葉は、元は大石先生のご師匠、藤解照海（とうげしょうかい）先生が作られた「よろこびの歌」に出てくるものです。この歌の二番に次のような歌詞があります。

「時間を空しく過ごさずと／たとえ力は足らずとも／ご恩報謝の祈りにて／
させていただく心こそ／我許されて生きる道／よくなりたいとは思わねど」

ここに「許されて生きる」という言葉が出てきます。この言葉について、大石先生は藤解（とうげ）先生に出会われて間もない頃、藤解先生に質問されたことがありました。

「私は『許されて生きる』ということは聞いたことがないんですね。権利、義務、それに優劣を競う世界の中で、ずっと人を、人生を見てきました。それでね、お師匠様のお供で郷里の町を歩く時に『先生、私は許されて生きるということを聞いたことがありません。誰が許すんですか。誰が許されるんですか』と聞いたんです。（中略）そしたらお師匠様は端的に『わしの生活は天に許され、地に許され、いっさいに許されていく生活です』と。私には分からんけど何か私の救われる世界は、そういう世界にあるんだろうという気がしました」

（ＮＨＫラジオ深夜便「心の時代」放送『生きていてよかった』十三頁）

「許されて生きる」――これは人権意識の浸透した現代人の考え方からはいささか抵抗のある言葉、なかなか理解しがたい言葉です。私も最初この言葉に接した時、少し違和感を感じ、どういうお心なのだろうかなと思っていました。現代の常識からすれば、卑屈な姿勢と受け取られかねないという気持ちもはたらきました。しかし一方では不思議な解放感というか、広々とした自由な響きもこの言葉から感じて、ずっと私の課題になっていました。

これを卑屈な姿勢と感じたのは、私の立っていた場所が人との比較の中にあったからです。自分に値打ちをつけたい心、人より上に立ちたい心に立っていたからです。そういう心しかない者が、心ならずも人から温情を施される立場に立たされた時、しかも生きる上でどうしてもそうしないと生きていけない状況に追い込まれた時、そのような自分を顧みて卑屈と感じるのです。

藤解先生の言われた「許されて生きる」が、それとは根本的に異なるのは言うまでもありません。

◇ところでロシアの文豪ドフトエフスキーの作品に『罪と罰』という小説があ

ります。この小説の主人公はラスコーリニコフという、優秀だが貧乏な学生です。彼は自分の思想の為に、金貸しの老婆を鉞で一撃して殺してしまいます。生きていても世の役に立たないばかりか、欲深くて害になるだけの老婆だから、殺してその金を前途有為な学生の為に使った方が、余程世の為人の為になると考えたのです。全て計画通りに事が運んで、警察も彼の犯行だという確証を掴むことはできません。ところがたった一つ計画通りに行かなかったことがありました。犯行の後、自分自身の犯した罪の重さにひどく苦しみ始めたことです。その苦悩の中で、ラスコーリニコフはある女性に会います。極貧の父母や兄弟を救うために、自分の身を犠牲にして娼婦となったソーニャです。彼女は深い信仰に生きる女性でした。苦悩するラスコーリニコフは、そのソーニャの中に、自己の救済の道を直感的に感じ取ります。そして自分は一体どうしたらいいのかとソーニャに問うのです。

「彼は膝の上に両肘ついて、釘抜きで締め付けるように、両の掌で頭を抱きしめた。『ああ、何という苦しみだろう！』悩ましい悲鳴がソーニャの胸からほとばしり出た。『さあ、これから僕は、どうしたらいいんだろう、いってくれ！』急に頭を振り上げ、絶望のあまり醜くゆがんだ顔を向けて彼女を見ながら、彼はこう訊ねた。『どうしたらいいって！』と彼女は叫ぶなり、いきなり席を躍り上った。と、今まで涙で一杯になっていた彼女の眼が、急にらんらんと輝き始めた。『お立ちなさい！（と彼の肩を掴んだ。彼はほとんど驚愕に打たれて彼女を見ながら、体を持ち上げた。）すぐ、今すぐ行って、四つ辻にお立ちなさい。そして身を屈めて、まずあなたが穢した大地に接吻なさい。それから、世界じゅう四方八方へ頭を下げて、はっきり聞こえるような大きな声で、《わたしは人を殺しました！》とおっしゃい！　そうすれば神様がまたあなたに命を授けて下さいます。行きますか？　行きますか？』彼女は発作にでも襲われたように、全身をわなわなとおののかせ、男の両手を掴んでひしと握りしめ、火のような眼で彼を見つめながら、こう問いかけた。」

（新潮文庫『罪と罰』下、二百四十一頁、二百四十二頁）

このソーニャの言葉は、人を殺したラスコーリニコフにだけ言われている言葉でしょうか。私は人を殺していないから関係ないと言えるでしょうか。いや。ラスコーリニコフは私の自我の象徴ではないかと思います。ソーニャは「あなたが穢した大地に接吻なさい」と言います。「大地を穢すもの」――それこそ自我のことではないかと思います。心の中で沢山の命を殺してきたもの。それが私の自我です。自我とは本質的に大地を穢し、人を殺し、命を殺すものです。つまり自分のために大地も、人も、命も利用し、使い捨てて顧みないのです。その自我は、しかし、終に生きられません。その行き詰まった自我が、途方にくれて、「さあ、これから僕は、どうしたらいいんだろう、いってくれ！」と叫んでいるのです。

その自我は、世界じゅう四方八方へ頭を下げて、「わたしは人を殺しました！」と、身を大地に投げ出す時、始めて生きる道が与えられるということです。自我とは、最後まで自我に立ち通そうとする性を持っています。「私は間違っていない。私は正しい。間違っているのは向うの方だ。どうして頭など下げられるものか」と、そう思っています。しかしその自我に立ち通す限り、終に生きる道は開かれないのです。

◇私がかかえている自我の闇は、ちょっとやそっとの深さではありません。それに光が当るのは容易なことではありません。

『大無量寿経』に「逆違」という言葉が出てきます。この「逆違」について親鸞聖人は、「逆はさかさまという。違はたがうというなり」と注意を促しておられます。わざわざこういう注釈をつけておられる所に、天地に背き、あらぬ方向へと突き進む自我の姿をまざまざと教えてくださるお心を感じます。

自我とはまさに天地に逆違する心です。親鸞聖人はご和讃の中に、「みずから過咎をなさしめて／もろもろの厄をうくるなり」（自分が自分自身に対して過ちを犯し、自らを責め立てては、もろもろの苦しみや禍を自ら受けていくのである）と書いておられます。天、地、人に反逆し、それらを踏みにじることは、結局自分自身の命を痛ましく傷付けることになるということです。ラスコーリニコフ

は老婆を殺したことによって、自分自身の命を殺したのです。それが私の自我の姿です。

自分に値打ちをつける心、人の上に立ちたい心、自分さえよければ他はどうなっても構わぬという心によって、天地に背き、人を傷つけて、結局自ら生きる世界を狭め、生きることを苦しいものにしているのです。曇鸞大師が書かれた「蚕繭自縛」の譬えの通りです。蚕は自分で出した糸で、自分自身を縛って外に出ることができません。自我も同じです。誰のせいでもありません。そういうかたちで罰を受けているのです。自縄自縛という罰を。

◇そういう私に対して、はるかな昔から、じっと私の目覚めを待ち続け、そのために心をくだいておられるのが阿弥陀如来です。またその修行時代である法蔵菩薩です。大石先生は次のように書いておられます。

「如来様はね、無始よりこのかた、私をとがめたまわず、責めたまわず、無始よりこのかた、今日、この時間にいたるまで、私を救おうと思うて、私の宿業の中でじっと手をつかれて、私につきまとわれて、私が助かるために行をされたんです。それを、法蔵菩薩とおっしゃるんです」

（ＮＨＫラジオ深夜便「心の時代」放送『生きていてよかった』四十八頁）

前月号で、どんな人に対しても畳に額を付けられ、「このご恩は死んでもよう返しません。こらえてください」と言って合掌された大石先生のお母さんのことを書かせていただきました。そのお母さんのお姿は、はるかな昔からじっと手をついて、私を待ち続けられるの法蔵菩薩の具体的なお姿そのものだと言っていいと思います。

「許されて生きる」とは、私の自我の毒を、じっと手をついて、逃げず全身で受け止めてくださる法蔵菩薩。そういう目に見えぬ働きに支えられてこそ、この私もようやく生きていくことができるのだと気付かせていただいた、その驚きと深い謝念の叫びではないかと思います。

「誰が許すんですか。誰が許されるんですか」――許されるものは何かとい

えば、我執をもってなりふり構わず、他を蹴散(けち)らかして生きるこの私です。では誰が許すのかといえば、許すものはいない、というのが本当ではなかろうかと思います。ただ、許されているものがここに居るということです。

許されるものがいれば、許すものがいるのが普通です。しかし「許されて生きる」――この言葉は、そういう対立関係の言葉ではなくて、知らされ、受け止めさせていただいた目覚めの言葉です。許されていると受け止めた人において、始めて許すものが見出されるのです。それが「わしの生活は天に許され、地に許され、いっさいに許されていく生活です」というお言葉となるのだといただいています。

天、地、一切の人、一切のもの。それらは私を許すとか許さぬとか、そんな高い所にいるわけではありません。むしろ私よりもっと下にいて、黙って私を支えてくださっている存在です。どんなに無視され、つばを吐きかけられても、黙って支え続けてくださっています。にもかかわらず、私は上から踏みつけ、無視して、顧みることがありません。そのことにはじめて気付かされた時の叫びが、「許されて生きている!」です。

◇ここで、以前読んで感銘を受けた和辻哲郎(わつじてつろう)博士の逸話(いつわ)を思い出しました。それは次のようなものです。

「和辻哲郎先生の廻心というのは、非常に素朴なかたちで経験されているのですね。それはお父さんでしたか亡くなられた時のことです。和辻先生はたしか姫路の近く、船津の出身と思います。東大の教授で、世界的に有名な学者です。ところが故郷へ帰って葬式をされると、その故郷には土地の風習として葬式を出した家のものたちは、会葬者に対して会葬者が帰っていく時、墓の出口に土下座をして礼をのべることになっていたのです。和辻先生は自分の誇りがあって、それが素直に出来なかったのです。『このような田舎の人々に、どうして土下座など出来ようか』ということです。しかし、最後は、止むを得ず土下座されたのです。そうすると、田舎の人々の足音が聞こえ、わらじぐらいし

か見えないのです。しかし、土下座しているうちに、和辻先生は、大地の心とでもいうべきものが、自分自身のなかに蘇（よみがえ）るわけです。大地の心とは、自分は一人で今日まで生きてきて、自分一人の力で偉くなったように思っているけれども、自分自身は大衆に支えられていたのだな、ということです。大衆に支えられてこそ生きているにもかかわらず、その大衆に向かってつばを吐きかけようとしていた。それが土下座してはじめてわかった。だから、和辻先生は、これからはもう自分ひとりのために生きるのではない、自分を支えていてくれる大衆のために生きよう、と決断されるのです。そのような経験を契機として、大衆というものは、実は、私自身のいのちの内容だということを、和辻先生は自覚されたのですね。」

（竹中智秀師『無三宝処への往生』六十五、六十六頁）

「自分は大衆に支えられていた」「にもかかわらず、その大衆に向かってつばをはきかけようとしていた。それが土下座してはじめてわかった」

ここにも「許されて生きる」の世界を教えてくださるものが流れています。「許されて生きる」ということは、誰か許すものがいるのではありません。「「自分は一人で今日まで生きてきて、自分一人の力で偉くなったように思っている」そのような邪見憍慢（じゃけんきょうまん）な心の姿を、私の存在を黙って支えてくれる大地の心に触れることによって、はっきりと見せてもらった。その懺悔（さんげ）のほとばしりです。その懺悔（さんげ）はまた、今まで気付くことのなかった自分の姿を見せてもらったという喜びでもあります。

「だから、和辻先生は、これからはもう自分ひとりのために生きるのではない、自分を支えていてくれる大衆のために生きよう、と決断されるのです」そういう生きる姿勢の転換を呼び起こしてくるものが懺悔（さんげ）です。

◇私は今回「許されて生きる」のこころを尋ねさせていただくに当り、大石先生の五冊の著書を改めて読ませていただきました。全部を精読する時間はありませんので、傍線を引かせてもらった箇所を中心に通読させていただきました。大石先生のご生涯の歩みがどんなに稀有（けう）のものであるか。その思いを一層深く

しました。このようなご生涯、そしてその歩みの記録である五冊の本。それを目の前に与えられてあることの僥倖（予想もしなかった幸運）は、とても言葉で尽せるものではありません。そのことを改めて感じました。それとともに大石先生のご生涯の底には、「許されて生きる」の心が一貫して流れていることを改めて強く感じました。

二箇所だけ抜粋させていただきます。一つは『許されて生きる』の最初に載せられているものです。

「父は合掌して『春峯君、済まなかった』と言い、両手をついて・・・頭を畳につけました・・・」

そう絶句したまま、三男のあいさつは終わりました。私は言葉はでません。」

（『許されて生きる』二十頁）

このように三男の春峯さんが、三十数年前の大石先生の姿を、法座の感話の中で語られたことが書かれています。この春峯さんの感話の言葉を受けるかたちで、大石先生は次のように書いておられます。

「事件を起こさせたのは私です。はるか彼方にさかのぼっても謝りきれない、春峯に対する懺悔の気持ちでした。（中略）そうして歩み続けた一つの道の彼方で、Kさんとの『出会い』があったのです。（中略）Kさんを下に見て、温情を施すという立場に立っている自分の姿を知らせてもらったのです。過去、すべてがそうでした。子供に対しても同じことが言えるのです」

（『許されて生きる』二十一頁）

もう一つは、次男の示朗さんが、大石先生の二冊目のご著書『どうなろうとこの道一つ』のあとがきに書いてくださった、若い頃の大石先生のお姿です。

「われわれが中学生の時に住んでいた家は、家族五人が雑魚寝するような狭さでした。そんな中で父は子供に畳の部屋を与えてくれて、これまた狭い玄関の土間を自分の『部屋』にしていました。板を敷いて座り机を置き、そ

こで仏典を読んだり、考えごとをするのです。薄暗いし、冬になると冷える場所です。父が勝手なことをして貧しいのなら反発もしたでしょうが、文字通り一番低い場所に自分の身を置いて、大きい理想に向かってぐんぐん進むのですから、文句を言わせない迫力がありました」

（『どうなろうとこの道一つ』百八十八頁）

二つとも少年時代の息子さんたちの目に焼き付いた、求道時代の大石先生のお姿です。中学生の息子さんに向かって、合掌し両手をついて、「春峯君、済まなかった」と畳に額を付けて言われるお姿。土間を居場所として、ひたすら道を求められるお姿。大石先生の八十二年のご生涯を一貫する姿勢がどういうものであるかを、これらのお姿が、理屈や説明をこえて私に見せてくださいます。

◇もう一つ、改めて言葉を失う思いをした箇所があります。

昭和四十年二月、大石先生四十四歳の時です。大石先生は、三日間の法座がその日から始まるという日の朝、寺を逃げるように出て、野宿しながら山間部の無人のお寺（地蔵院）へと歩いて行かれたのです。その法座には先生のお母さんも参加されることになっていました。それを知っての上のことです。長い求道の歩みの中で、大石先生が一番苦しかった頃のことと思われます。先生の家に滞在しながら参加されたお母さんは、奥さんのお話によると、三日間黙して何も語られず帰っていかれたということです。お母さんにとっても、どんなにつらい三日間であっただろうかと思います。

そしてその三年後、昭和四十三年一月、その時の出来事を受けて、お母さんが大石先生に手紙を出されるのです。大石先生の求道の苦しみを誰よりも分かるが故に、最も心を痛められたお母さんが、三年間の沈黙を破って、心の全部をふり絞るようにして、先生に対するおしかりの言葉を書かれたのです。わが子に対し、これほど切々として愛情のこもったお便りは、そうめったにあるものではありません。

その中の次のようなお言葉があります。

「理屈はいらぬ。只、今迄どおりに、すなおに聞かせていただいて、同行様や皆々様を仏様と拝んで、一番下に下がって、自分の智慧の至らぬことを知らせてもらい、只、ハイハイと生かされ、誠に誠に弥陀の名号ひとつ、真に信じるばかりと、いつもお前の手紙に書いているではないですか」

（『どうなろうとこの道一つ』七十五頁）

「何事も思うことはない。只、我の邪見憍慢（じゃけんきょうまん）の心の姿を悟らして下さる親様のお姿を拝む所に解決があります」

（同七十六頁）

大石先生は今もこのお手紙は大切にしまっておられると、本の中に書いておられます。

「一番下に下がって、自分の智慧の至らぬことを知らせてもらい、只、ハイハイと生かされ・・・」

「只、我の邪見憍慢（じゃけんきょうまん）の心の姿を悟らして下さる親様・・・」

こういうお言葉は、まさにお母さんの魂をくぐって絞り出され、ほとばしり出てきたお念仏、すなわち仏の深い呼びかけの声であることをひしひしと感じます。大石先生はつねにお母さんのこの声を念じながら、今日まで歩んでこられたのだと思います。そのお母さんの念力が、大石先生のあの稀有（けう）な歩みの底に、つねに働き続けていたに違いありません。

◇「許されて生きる」という言葉のこころについて尋ねてきましたが、この言葉によってあらわされる世界にこそ、「生まれてよかった」と私が心の底から頷（うなず）くことのできる道があったのです。大石先生のお母さんのこれらのお言葉は、そのことを私に呼びかけてくださいます。このような呼びかけこそが、「よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなき」世界の中で、唯一の「まこと」であることを、今更のように感じます。

このような如来様からの深い呼びかけの声を聞かせていただくとき、一歩でも、半歩でも、ご恩に報じる歩みをさせてもらうおうと立ち上がる力を賜ります。そこに私の生涯を投げ出しても悔いない、一筋の道が開かれていることを

感じます。

「時間を空しく過ごさずと／たとえ力は足らずとも／ご恩報謝の祈りにて／
させていただく心こそ／我許されて生きる道／よくなりたいとは思わねど」

◇最後になりましたが、先月号の「心光寺からの便り」七頁に、大石先生のこれまでの書信をコピーして私に渡してくださった方を、「末松和子さん」と書きましたが、「末松道子さん」の誤りでした。深くお詫び申しあげます。

それから同三頁に、蓮如上人の「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」ということについて、「南無阿弥陀仏に触れた人の具体的な生き様に触れさせていただくことだ」と書きました。そのことについて、ある方から丁寧なお葉書をいただきました。「すがた」とは「いわれ、こころ」ということではないかと指摘してくださいました。これは全くご指摘の通りであります。実はそこで私が言いたかったことは、そのことを踏まえた上で、その「いわれ、こころ」にどのようにして触れることができるのか。それは南無阿弥陀仏に触れた人の具体的な生き様に触れさせていただくことによってではなかろうか、ということでした。不正確な表現になりましたことを、この場を借りてお詫び申しあげます。

◇さて、今年もいよいよ報恩講がやってまいりました。今年も北海道から辻山三郎様、須崎良雄様、金森薫様、佐藤光男様の四名のお同行様が、遠路、ご高齢を押してはるばるお参りくださいます。その尊い道心に手を合わせずにはいられません。

皆様方もどうぞ二日間ともお参りくださいませ。心よりお待ち申しあげます。遠くの方はどうぞ当院に宿泊してお参りくださいませ。

宮岳文隆　拝

南無阿弥陀仏

平成十五年十一月九日

摂　取　山　心　光　寺